

幸田露伴の趣味論について 一時代の正当なる批判者となるために

梁鎮輝

発表者はこれまで近代文学を小説中心に構成する常識を批判する立場から、幸田露伴（1867～1947）が精力的に幅広く行った戯曲・詩歌・史伝・考証・評論・随筆・翻訳・考釈などの創作を再評価してきた。

本発表は、従来の研究において看過されてきた、露伴が明治後期から大正初期にかけて展開した趣味論について分析を試みることを主な目的とする。

明治40（1907）年に発表された小説「一條路」（『中央公論』）は「性質も素性も境遇も異なつて居る」二人の青年が社会主義に傾倒し、「一ツ車に乗つて一條の路を旅する」というストーリーである。旅の中で、意見が食い違う二人が議論する場面は重要なシーンとして描かれている。その結末において、露伴は「主義は一致できる、趣味は一致できぬ、人生を支配するものは主義許りでは無い」という感嘆を残した。

人生を支配するものとしての趣味と言うと、その前年に『帝国文学』に掲載された夏目漱石の「趣味の遺伝」を想起せざるを得ない。しかし、「趣味の遺伝」に描かれる宿命的趣味に対して、露伴は「時代の風潮に溺れず（中略）外国の事情、或は歴史上、又は外国の文学宗教美術等、総て今日の時代と離れたるもの、扱は地方の種々なる感情や思想等を知つて、そして自己の感情思想を養ふように努めねばならぬ」と、後天的に養成できる趣味を強調している。さらに趣味の向上を図り、「時代の正当なる批判者」を目指すべきと述べる。

この小説と同時期に露伴は「趣味と結婚」（『趣味』1907）、「初夏の趣味」（『時事新報』1910）、「宜しく趣味の向上をはかれ」（『婦女界』1912）、「明治時代趣味の変遷」（『成功』1912）、「業務と趣味」（『実務之世界』1914）など、多くの文章を異なる雑誌媒体で発表している。

本発表は、これらのテキストを再読し、露伴が展開しようとする趣味論とは如何なるものであったのかを呈示すると同時に、その趣味論が、露伴の文学、宗教、美術などに対する態度にどのように結び付けられるのかも検討の射程に入れる。

幸田露伴の趣味論について
—時代の正当なる批判者となるために—

明德義塾高等学校 梁鎮輝

明治 20 年代に小説家として輝かしい功績を収めた幸田露伴（1867～1947）は、明治 38（1905）年 5 月『読売新聞』に連載していた長篇小説「天うつ浪」を中絶させたことをきっかけに、次第に小説というジャンルから遠ざかりつつあった。「天うつ浪」が未完に終わったことは言うまでもなく露伴にとって大きな転換点であった。露伴は、小説を中心としていく近代文学の主流に順応することなく、随筆、史伝や評論などの形式において独自の文学空間を構築し、様々な試みを行い続けた。

従来の研究に見られる明治 20、30 年代の作品（とりわけ小説）に集中してしまう傾向の是非に対して、登尾豊（2006¹）、関谷博（2006²）、出口智之（2012³）、王菁潔（2014⁴）、吉田大輔（2020⁵）などの研究者は異議を唱え、それぞれの切口から露伴という人物とその多彩な作品群を再評価している。

本発表は、上述の先行研究の流れを汲みつつ、転換点以降に、即ち明治後期から大正初期にかけて露伴が展開していた趣味論について分析を試みることを主な目的とする。

再び、小説という形式を用いて、人生を支配するものとしての趣味を主題に据えることや、その後、趣味に関する多くの文章を異なる雑誌媒体で発表していることと合わせて考えれば、趣味に対する思索はその時期の露伴にとって紛れもなく重要なテーマの一つであったと言える。

露伴の展開した趣味論は当時の趣味に関する言説と如何なる関係を持つのか、またその趣味論を通じて露伴はどのようなメッセージを発信しようとしたのか、更に趣味論を通して露伴の文学を再考する時に、どのような知見を得ることができるのか、などの問いを射程に、露伴の趣味論について分析を行いたい。

一、趣味という語の複雑さ

大槻文彦編『大言海』の第 2 卷（富山房、1933）を確認すると、趣味について（1）オモムキ・オモシロミ・アヂハヒ・興味・風韻・風致、（2）智的嗜好、（3）美ヲ、知覚、弁別スル能力という 3 つの用法がある。ここに書かれている（1）は従来の漢語文脈としての意味、（2）は現代では主要となる用法、いわゆる「Hobby」としての意味、（3）は西洋からもたらされた美学の新たな概念である「Taste」が趣味という語に付された用法である。

明治 10 年代に Taste の訳語として嗜好を当てるのがまだ一般的であったが、明治 20 年代になると趣味という語の使用が多く見られるようになる。澤本亜希（1999⁶）によると、明治 20 年代の趣味の語の流行をもたらしたのは徳富蘇峰であり、「蘇峰は雑誌『国民之友』で多くの文学論を展開し、その中で「趣味」を多用している。『国民之友』内では彼の他に、森田思軒、森鷗外等の記事に「趣味」の使用例が見られる」と紹介した。更に、文学者たち

をはじめとする社会変革を求める人たちにとって趣味は「都合のよい、新しい感覚を示すことの話だった」と指摘している。

太田蔵人(2020⁷)は蘇峰、北村透谷、矢野龍溪、国木田独歩らの趣味に関する用法を分析し、明治30年代における趣味をめぐる議論は、「個々の「趣味」がそれぞれにたしからしく提示する唯一の「理想」と、描くべき空間に複数の「趣味」がひしめているという実感とのあいだで揺れうごいている」と分析した上で、「それぞれの「趣味」の背後にある価値の体系をどのようにたたかわせ、どのように選ぶか」という明治初中期に存在した問題は、明治末期になると見えにくくなってしまおうと説明している。

明治39年、雑誌『趣味』が創刊され、坪内逍遙はそこで「主として音楽、演劇、話術、絵画、建築、遊戯、流行等を家庭に供し以て二十世紀の我が国に貢献する所あらん事を期す」とその理念を語っている。孫軍悦(2002⁸)は雑誌『趣味』の理念から「中間文化としての「趣味」は主に「家庭」に提供するもの」であり、「日本人の感性で西洋の文化を吸収、消化した上で創り上げた「良き」趣味は和洋折衷のスタイルとして中、上流家庭において現れた」と見ている。

ちなみに、露伴は雑誌『趣味』に「游魚の説」(1906)、「将来遊技の一大科」(1907)、「趣味と結婚」(1907)の3つの評論を発表しており、趣味に関する言説空間の構築にここから参与していることが確認できる。そして、これらの評論においてはいずれも、芸術の鑑賞よりも日常的な事柄を論の中心に据えていることが分かる。

また、石井研堂著『増訂明治事物起原』(春陽堂、1926)の「趣味の熟字」という項目には「趣味といふ語は、明治四十年ころより、盛んに坐談平話にも使用せられ、月刊雑誌の題にも、趣味・趣味の友・釣魚趣味など、種々に使用せり」と趣味という言葉の持つ意味が広がっていったことが記載されている。

神田由紀(2016⁹)は明治40年代における百貨店を中心に近代的な大量消費の文化が開化していく中で重要な役割を果たしていたのが趣味というキーワードであると述べた上で、「趣味が消費を介して広められる際、大衆の受け容れやすい方法でその獲得方法が示されるようになる」と指摘している。

露伴が趣味論を展開した時期はまさに趣味が大衆化していく時期と重なっており、後述するように、露伴の使用する趣味という言葉に、「Taste」と「Hobby」、江戸由来の漢語としての意味合いが同時に存在している。当時、文学や美術など、できつつある多くの近代的な価値体系ではなく、露伴は知識階級の特権から大衆へ浸透していく趣味というものを選択したことの意味について更に考えたい。

二、時代の正当なる批判者を目指して

露伴は趣味論の流行の担い手の一人であると言える。「趣味と結婚」(『趣味』1907)、「初夏の趣味」(『時事新報』1910)、「宜しく趣味の向上をはかれ」(『婦女界』1912)、「明治時代趣味の変遷」(『成功』1912)、「業務と趣味」(『実務之世界』1914)などの文章があるほか、

『努力論』（東亜堂書房、1912）や、趣味の教育普及会によって刊行された『洗心録』（1928）においても趣味論を積極的に展開した様子が見られる。

「趣味は人の嗜好なり、見識なり、気品なり、性情なり¹⁰」と述べる露伴は、「一條路」という小説の中で、「性質も素性も境遇も異なつて居る」が社会主義に傾倒した二人の青年が「一ツ車に乗つて一條の路を旅する」様子を描いた。旅の中で、意見が食い違う二人が議論する場面は重要なシーンとして描かれている。出発当初、華族に生まれた梅辻が、貧家である新井に合わせようと、乗ったことのない三等車に乗った。しかし、そこで下品な男に絡まれ、梅辻は非常に不快に感じた。その後二人は成田で下車し、新勝寺を見学した。ここで彼等はまず境内の美について議論をし、最終的には美術や文学の価値を問うことまで発展する。結論がでないまま、二人は新勝寺を去り（佐原にある）宿に入った時、宿の装飾があまり気に入らない梅辻に対して、新井は「宜い家だネ。大きに吾輩を優遇すると見える」と言ったが、梅辻からの返答はなかった。翌日、帰りの電車の中、寝ている新井を見つめながら、梅辻が「主義は一致できる、趣味は一致できぬ、人生を支配するものは主義許りでは無い¹¹」と独り言をしたところで小説は終わる。

この小説について、これまであまり正面から論じられることがなかった。塩谷贊は「凡作」と評し、特別に重要視していないのに対し、柳田泉は「時代の文学に対して多少の諷するところがあつたかも知れない¹²」と露伴のこの作品に込める真意を考えていた。発表者は、「時代の文学」という限定的な見方で露伴の作品を捉えるよりも、「時代」に対する露伴の示唆がその作品の主題である趣味論には込められていると考える。

露伴の趣味論は、二つの意味合いを持っている。一つは「趣味なるものは本具の約束から生じて来るものなのであるから、之に随順するのは非常に緊要なのである¹³」と先天的に捉える趣味である。もう一つは「時代の風潮に溺れず（中略）外国の事情、或は歴史上、又は外国の文学宗教美術等、総て今日の時代と離れたるもの、扱は地方の種々なる感情や思想等を知つて、そして自己の感情思想を養ふように努めねばならぬ¹⁴」と、後天的に養成できる趣味である。

そして、この後天的な意味合いの趣味について、露伴は向上を図り、趣味性を高めて「時代の正当なる批判者¹⁵」を目指している。時代批判の道具として、露伴は主義（イデオロギー）より趣味を重要視し、その効用を独自の論法で展開していった。

三、時代批判の道具としての趣味

「明治時代趣味の変遷」（『成功』1912）において、その具体的な批判について読み取ることができる。露伴はまず「前代の文明に対して趣味を存し、智識を有してゐるものは、それが善くつても悪くつても、寔に詰らぬもののように世間から取扱はれ、為に自ら埋蔵して居るという状態」に対する批判を示した。「旧弊頑固の四字を以て前代の趣味を排斥し、文明開化の四字を以て新しい趣味のみを尊重した態度は、必ずしも吾人を幸福にせぬ」と説明している。

上述の「一條路」において、新勝寺を「下らないぢや無いか」と評した新井の持つ「物に中心や統一の有りたがるのは極古い思想、イヤ古い思想といふよりは古い感情なんだネ」という主張は、まさに露伴がここで批判しようとする時代の思潮ではないかと考える。梅辻は社会主義的思想に惹かれつつも、いわゆる「旧趣味」という価値も認めたいがため、新井との議論は埒が明かない羽目になっていく。

旧趣味と新趣味の間に子を生じて、西洋ともつかず、純日本にも非ざる趣味が漸く生長せんとする傾向が現はれて来たのである。今後の趣味は、蓋し愈々其の富を増して百花繚乱たる状態を呈するに至るであらう。¹⁶

露伴にとって趣味というのはダイナミックに可変的なものであり、また近代ナショナリズムに基づく西洋と日本の二項対立を乗り越えるべきものであると考えられている。「趣味其のものゝの醇化」として、「佳きものは之を撰び卑しきものは捨て、旧いものゝのうちでも弊あるは去つて妙なるものは之を取る」という理想状態を目指さなければならないその主張には、近代への深い内省と批判が込められていると考える。

¹ 登尾豊『幸田露伴論考』学術出版会、2006年。

² 関谷博『幸田露伴論』翰林書房、2006年。

³ 出口智之『幸田露伴の文学空間：近代小説を超えて』青簡舎、2012年。

⁴ 王菁潔『大正期の幸田露伴』筑波大学博士論文、2014年。

⁵ 吉田大輔「幸田露伴「御手製未来記」(一九一)における商業アイディア：その文化史的・産業史的意義の一端について」『比較文学』第65号、51～65頁、2020年。

⁶ 澤本亜希「国木田独歩『武蔵野』考：「趣味」の語を中心にして」高知大学国語国文学会『高知大國文』第29号、34～47頁、1999年。

⁷ 太田蔵人「「趣味」(Taste)とは何か：近代の「好古」江戸東京研究センター『好古趣味の歴史：江戸東京からたどる』198～219頁、2020年。

⁸ 孫軍悦「〈趣味〉の力学：『それから』論」『奈良教育大学国文：研究と教育』第25巻、25～38頁、2002年。

⁹ 神田由紀「消費における趣味の大衆化：百貨店における人形玩具趣味と風流趣味を例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第197集、9～48頁、2016年。

¹⁰ 幸田露伴『洗心録』趣味の教育普及会、1928年、249頁。

¹¹ 幸田露伴「一條路」『中央公論』1907年4月、17頁。

¹² 柳田泉『幸田露伴』中央公論社、1942年、411頁。

¹³ 幸田露伴『努力論』東亜堂書房、1912年、240頁。

¹⁴ 『露伴全集』別巻上、岩波書店、1980年、397頁。

¹⁵ 同14、395頁。

¹⁶ 同14、425～426頁。